

Brugada症候群と冠攣縮性狭心症の 合併頻度についての検討

久次米真吾*¹ 高野 誠*¹ 北條林太郎*¹ 小田切史徳*¹
仲井 盛*¹ 小宮山浩大*¹ 弓場隆生*¹ 辰本明子*¹
水澤有香*¹ 田辺康宏*¹ 大塚信一郎*¹ 深水誠二*¹
手島 保*¹ 櫻田春水*¹ 西崎光弘*² 杉 薫*³
平岡昌和*⁴

【背景・目的】Brugada症候群に関して様々な検討がなされており, 冠攣縮性狭心症を合併する頻度が高いことが特徴の一つであるとする報告が散見される。しかし, これらの報告は, Brugada症候群における冠攣縮性狭心症の合併頻度の提示にとどまるのみであり, 非Brugada症候群との比較検討はなされていない。

以前より, 器質的冠動脈狭窄と冠攣縮性狭心症との関連が知られており, 日本人は特に冠攣縮性狭心症の合併頻度が高いとされている。冠動脈攣縮は, ある一定の頻度で誰にでも起こりうる現象で, Brugada症候群に特異的に合併率が高いものではない可能性がある。

今回われわれは器質的冠動脈狭窄のない患者群を, Brugada症候群患者と非Brugada症候群患者とに大別し, それぞれの冠攣縮性狭心症の合併率を調査し, Brugada症候群において冠攣縮性狭心症の頻度が高いか否かの比較検討を行った。

【方法】心臓電気生理検査に先立ち, 冠動脈造影を施行。器質的狭窄がないことを確認した後にアセチルコリン負荷冠動脈造影を行った。アセチルコリン負荷により99%以上の冠動脈狭窄と心電図変化がみられた場合に冠攣縮性狭心症と診断した。

【結果】非Brugada群36人(平均52歳)のうち5人(14%), Brugada群35人(平均47歳)のうち6人(17%)で冠攣縮性狭心症が陽性と診断された。

【結論】Brugada症候群の有無にかかわらず, 両群間では同程度の頻度で冠攣縮性狭心症の合併が認められた。Brugada症候群で冠攣縮性狭心症の合併が特異的に多いものではないことが示唆された。

Keywords

- Brugada症候群
- 冠攣縮性狭心症

* 1 東京都立広尾病院循環器科

(〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿2-34-10)

* 2 横浜南共済病院循環器病センター内科

* 3 東邦大学医療センター大橋病院循環器内科

* 4 東京医科歯科大学

Investigation about the frequency of the vasospastic angina in Brugada syndrome

Shingo Kujime, Makoto Takano, Rintaro Hojo, Fuminori Odagiri, Mori Nakai, Kota Komiyama, Takao Yuba, Akiko Tatsumoto, Yuka Mizusawa, Yasuhiro Tanabe, Shinichiro Otsuka, Seiji Fukamizu, Tamotsu Tejima, Harumizu Sakurada, Mitsuhiro Nishizaki, Kaoru Sugi, Masayasu Hiraoka